

## 1 土から生まれたきもの

奄美のみやこ 名瀬のまち  
新川(しんご)の水で てーち木染めて  
絶えぬおさ音 ほほえみかわす  
島の名産 手織りの紬

赤土はだの 段ばたけ  
不作のとしが 続ことままよ  
母のかたみの つむぎに生きる  
わたしゃ大島 はた織りむすめ<sup>1)</sup>

奄美の新民謡に歌われているように、かつて名瀬の町は本場奄美大島紬の中心地でありました。池野幸吉の「名瀬大正外史」<sup>2)</sup>には、伊津部いふのあたりは新開地で地方から流入した人たちがつむぎ工場にあつまり、名瀬の人々の生活は多かれ少なかれつむぎの製造販売で成り立っていた様子が描かれています。太平洋戦争終了後ようやく本場奄美大島紬が復活したころ、筆者の記憶をたどっても新川のほとりには10軒ちかいしゃりんばい(てーちぎ)染め工場があり、赤いどろどろした廃液が川に流れ落ちていました。しゃりんばいの煮出液で絹糸を染め、安勝山の田圃の泥で媒染して、帰りに新川の水で泥の汚れを洗い落としてきた様子が、この新民謡から想像することができます。

本場奄美大島紬の泥染めは奄美に自生するしゃりんばいの原木をチップ状に細断し、煮だした染液の中のタンニン色素と自然の泥土に含まれる金属類(鉄分等)とを絹繊維上に反応させて染着させます。この染色法は絹糸をしゃりんばいの常温液で4~5分押さえもみしながら染液を50~60回更新して染色します。染色途中絹糸を乾燥させ、続いて泥田で3~4回振りつけ、もみこみ染色を繰り返すとタンニン鉄によって黒色に着色されます。泥染めはこのように伝統的な手法で行われますが、精巧・緻密な絹糸の染色は長年の経験と高度な熟練が必要です。その結果、泥染めは

軽い  
暖かい  
しわになりにくい  
着くずれしない  
しなやかである  
渋い色調がある

等の独特の心地よい風合をもつ生地ができあがります。

大島紬が確かな記録として現れるのは享保5年（1720年）、大島、喜界島、徳之島、沖永良部島四島への紬着用禁止令であると言われます。

「与人、横目、目指、筆子、掟までの役人は紬着用を許すが、下の者には紬着用を一切許さず」（大島政典録）<sup>3)</sup>

次いで、1850年（嘉永3年）～1855年（安政2年）奄美に滞在した薩摩藩士名越左源太の「南島雑話」<sup>4)</sup>の中に衣服のこと、養蚕のこと、芭蕉のことという3章があり、絵入りで細かく記載されています。「田又は溝河の土の腐りたるをつけ、何べんとなく染る時は鼠色付きて、縞のむきにより染る。其土の染み、不染みはよく、嶋の織女よく見わくる也。泥の腐るをニチャと云う」とあります。大島紬といえば泥染め、泥染めといえば大島紬であるというくらい泥染めは本場奄美大島紬の代表的な染色です。

奄美大島が鹿児島と沖縄の間にあり、古くから道の島として南方との海上交通の要路であったことから南北の文化が交流し、織物技術も定着したものと思われる。亜熱帯性気候の奄美は無霜地域で年中桑の葉が茂り養蚕の適地として紬織物が盛んであったと思われます。初期の大島紬は地場産の手紬糸を山野の植物から抽出した染料で染色し、無地や縞の織物をいざりばた（地機）で製織しましたが、やがてこれに飽きたりずに芭蕉の繊維を使って手づくりによる緋糸を案出したと考えられます。

明治になって本場奄美大島紬もようやく生産、販売が自由となり、やがて市場で大きな人気を博するとともに需要も増大しました。生産が軌道に乗るにしたがい、家内工業から専業化、分業化へと進んで工場生産がなされ、産地としての基盤が形成され、特に明治の後期に締め機が開発されてから、本場奄美大

島紬の緋加工は技術的にも生産能率面でも一大進歩を遂げました。また染色面ではシャリンバイ泥染色が定着し、一方製織面では地機からたかはた（高機）への切り替え、原料糸の改善などもなされて高級緋織物としての名声と地位を確立しました。

これらの技術革新が大正、昭和にかけて実を結び、需要の増大とともに生産能力も上昇し、新製品の研究開発も進められて、奄美の一大地場産業にまで発展しました。

第二次世界大戦が始まると、本場奄美大島紬も生産低下を来しましたが、国の奢侈品製造禁止の規制から除外されて一部の製造が許可され、命脈を保っていました。しかし、昭和20年に奄美群島は交戦地となり、鹿児島産地もたび重なる空襲などの戦禍により工場、機械等が焼失し、壊滅的な打撃を受けて生産は皆無状態となりました。そのうえ終戦後奄美群島は米国の軍政下におかれ、本土との交通が途絶え、本場奄美大島紬の再興は危ぶまれていましたが、昭和25年ガリオア資金により原料絹糸を購入し、紬の生産が始まりました。

昭和28年に奄美群島は日本復帰したものの産地の立ち遅れは大きく、戦前並の復興は見込めないとの悲観論が強く、昭和29年に行われた産地診断でも本場奄美大島紬の生産目標は14～15万反で、その将来についても大きな期待はされませんでした。しかし、奄美の産業経済の復興は紬をおいてほかにないという業界、住民の意欲は強く、復興予算などにより官民一体の幾多の施策が実施されました。情報の収集、宣伝の強化、資金の融資等のほか、技術の改善研究、新製品の開発等が進むにつれ、需要が増大し、大島紬ブームを招来するまでになりました。

昭和47年に本場奄美大島紬の生産は29万反の戦後最高を記録しましたが、特に昭和45年に大島紬生産の韓国流出問題が起こったため奄美産地は一転して泥染めへ回帰するようになりました。製造の容易な色大島紬を伸ばすことで生産量を拡大してきましたが、ここで、伝統の原点にかえり、泥染め大島紬の生産に力を入れようとの機運が高まりました。泥染めという特長を前面に押し出して差別化しようということです。20軒足らずに減少していた泥染め工場も徐々に増え、昭和50年代には50軒に増加しました。生産も泥染め大島紬が過半数を越えることになりました。

まことに本場奄美大島紬は奄美の土から生まれた不思議なきものであります。

#### 文献

- 1) 嘉納大信 作詞，三界 稔 曲
- 2) 池野幸吉，名瀬大正外史，文芸プリント社（1984）
- 3) 名瀬市，名瀬市特産品協会，本場奄美大島紬 5，（1992）
- 4) 国分直一，恵良 宏 校注，名越佐源太，南島雑話，平凡社（1984）

